東京駅に立つ十字架

尾 島 信 之

奨励者紹介〔おじま・のぶゆき〕
日本キリスト教団大和郡山教会牧師
同志社大学キリスト教文化センター嘱託チャプレン

ほかにも、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた。〔そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」〕人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。民衆は立って見つめていた。議員たちも、あざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。

（ルカによる福音書 23章32―38節）

2016年の「流行りモノ」

今日を入れてあと4日で、2016年が終わろうとしています。この2016年を振り返ってみます時、さまざまな「流行りモノ」が登場してきたことが思い出されます。皆さんにとっては、何が「流行りモノ」として思い出されますでしょうか。

私は野球観戦が大好きですから、まずは広島東洋カープの25年ぶりのリーグ優勝と、その優勝の立役者の一人、鈴木誠也選手の神懸かり的な活躍を評した「神ってる」という言葉が思い出されます。また、我が家の小学生になる息子たちから教えられた RADIO FISH というダンス&ボーカルユニットが発表した「PERFECT HUMAN」という曲や、ピコ太郎さんが歌う、ペンにアップルとパイナップルが突き刺さるという「ペンパイナッポーアッポーペン」という不思議な曲を思い出します。そして最近では、ドラマ「逃げるは恥だが役に立つ」を妻と二人で食い入るように見て、主題歌に合わせて踊る「恋ダンス」に挑戦したりしました。

このように、2016年、私の家庭をさまざまな「流行りモノ」が通り過ぎていきましたが、私にとっての最大の「流行りモノ」の話を本日はいたします。それが、「シン・ゴジラ」です。

「シン・ゴジラ」にハマる

「シン・ゴジラ」は、1954年に劇場公開された「ゴジラ」を1作目とする人気特撮映画シリーズの29作目にあたり、2016年7月29日に日本全国の映画館で封切られ、最新のデータ（2016年11月16日現在）によりますと、今まで551万人が観たのだそうです。いろいろな指標があるようですが、だいたい200万人が観れば大ヒット映画と呼ばれるようですので、「シン・ゴジラ」は大ヒットの3倍弱の人が観ていま

すから、メガヒット映画と言えるかもしれません。因みに私は2回観に行きましたが、私のようにハマって複数回観に行く人が多いのだそうです。

また、そのように複数回観る人は、「シン・ゴジラ」の面白さを周囲の人たちに伝えたくなる傾向があると、ある雑誌で取り上げられていました。かく言う私も、ある牧師たちが集まる集会の近況報告で、「シン・ゴジラ」を観たという話をしてしまいました。そうしましたところ、向こうの方に座っていた先輩牧師が、隣にいたやはり先輩の牧師と、私の方を見ながら、ニタニタと笑っていました。何とも冷ややかな反応です。本日もともすれば、そのような空気に包まれてしまうかもしれませんが、あえて「シン・ゴジラ」の話をしたいと思います。もし、最後まで温かく見守り、耳をお貸しくだされば幸いです。

私の「3・11」体験

さて、「シン・ゴジラ」は、日本で暮らす私たちの「ある共通した体験」をベースに物語が構成されています。その体験とは「3・11」、つまり、東日本大震災であります。皆さんは、東日本大震災と言いますと、どんなことを思い出されるでしょうか。西日本に住みます私たちはおそらく、テレビ画面をとおして見た大きな揺れであり、想定をはるかに超える大きな津波であり、あってはならない原発事故ではないでしょうか。

私は3・11の当日、2011年3月11日は次の日にある従姉妹の結婚式のために、東京に滞在していました。地震が起きた午後2時46分にビルの32階にいたのですが、震度5強の揺れが波状的に襲ってきて、ビルが左へ右へと大きく揺れました。その揺れはなかなか収まることがなかったので、私は率直に「ここで死ぬのかもしれない」との思いがよぎり、ただただ怖かったこと。そして、余震が続く中、32階から非常階段で5歳になる長男を抱っこしたまま地上まで降りたこと。食べ物を求めてコンビニで奪い合うようにおにぎりとパンを買ったこと。ホテルの部屋に戻りテレビをつければ、東北の海沿いの街を襲う大津波、多くの人々が海岸に打ち上げられているとの情報、オイルタンクが破裂し街を燃やす様子、そのような映像が次から次へと流され、嫌になってテレビを消したこと。それでも、ホテルの外からは帰宅困難に陥っている人々のために、近くの避難所を知らせる放送が30分に1回流され、この東京も被災地であることの現実を逃れることはできなかったこと。それらを思い出します。

また次の日、結局従姉妹の結婚式は中止になり、空路で関西へと戻って来たのですが、羽田空港のロビーに置いてあるテレビが伝える「福島にある原子力発電所の原子炉の冷却システムを維持するための電源が失われている」というニュースに嫌な胸騒ぎを感じていたところ、到着した大阪の空港のロビーでその原子力発電所が水素爆発を起こしたニュースを目の当たりにし、その時以来1カ月、原発事故のニュースを食い入るように見たことも思い出します。私にとっての3・11の体験は、ただただ怖かったことであり、人生で今まで経験したことのない不安感に覆われた体験だったと言えます。

「シン・ゴジラ」で「3・11」を追体験

「シン・ゴジラ」の作中、そんな私の3・11体験と符合する模写がいくつも登場してきました。東京湾に突然現れたゴジラは、小さな川を遡上しながら上陸を試みるのですが、川上へとその歩みをどんどん進めると、岸に停泊している船が次から次へと川の水と共に堤防を越えて押し出され、それが街中へと流れていき、車も流され、それに追いつかれないように全速力で走って逃げる人が映し出される場面や、ゴジ

ラが歩いた場所から放射性物質が検出されるも、「直ちに問題になるような数値ではない」と政府関係者が言及したりする場面は、まさに、私たちが東日本大震災の報道を通じて、繰り返し見せつけられ覚えた既視感が下敷きになっていると言えます。

その既視感の極みとして、映画の終盤、自衛隊や米軍の攻撃によってもビクともしないゴジラの動きを封じるために、血液を凝固させる薬剤を、戦いに疲れてか東京駅の建物の真横で休んでいるゴジラの口に投与する「ヤシオリ作戦」を決行するのですが、普段は建設現場でセメントなどを流し込むために用いられるホイールローダーという重機が何台もゴジラの口に目掛けて大量の液体を流し込む様子は、東京電力福島第一原子力発電所で行われ続けた、原子炉を冷却するために建屋の外から何台もの消防車が放水を続けていた映像を、思い出させるものでした。

3・11から5年、忘れてはならないと思いながらも、一方で思い出すにはシンドイ事柄として忘れようとしていた記憶を、再び思い起こさせるには十分な迫力のある映像とストーリー展開でありました。とりわけ、ゴジラが口を裂けるようにして開け、火炎放射を開始し、それが光線に変化し、背びれからも放射線状に光線が放たれると、高層ビルが次々になぎ倒され、総理大臣や政府関係者を乗せた避難用のヘリコプターを撃墜し、東京が一面火の海と化す場面を初めて観た時には、私の中のトラウマが蘇り、ちょっとした過呼吸が引き起こされそうなほどでありました。

「シン・ゴジラ」の「シン」とは？

さて、「シン・ゴジラ」というタイトルの「シン」の意味について、総監督である庵野秀明さんによると、「新」しいゴジラ、「真」打ちのゴジラ、「神」のゴジラといくつもの意味が重なるのだそうですが、私は「神」としてのゴジラを見ています。

先ほどご紹介しましたように、ゴジラは最終的に人間の手で葬り去ることができず、大量の血液凝固剤を口から投入することによって動きを凍結する作戦に出るのですが、この時今まで全く太刀打ちできなかった人間側が逆襲に出て、ゴジラは徹底的に傷つけられ、最後には凍結させることに成功しました。初めて観た時には、軽快な音楽もかかって、今までの借りを返すかのように、イケイケドンドンでスカッとしてテンションが高まったのですが、2回目に観た時に、一方的に攻撃を受け、徐々に弱っていくゴジラのことが、とても可哀想に思えました。

と言いますのも、そもそもゴジラは、その1作からずっと貫かれている誕生の経緯として、人間が行った海上での水爆実験や海中投棄された使用済み核燃料の影響を受けて、そこに偶然生き残り生息していた太古の恐竜のような生物が変異してしまった産物である、としています。

つまり、ゴジラとは人間がこの現代において、第二次世界大戦では「戦争終結の切り札」、また、米ソ冷戦下においては「政治上の交渉道具」、あるいは世界各国の「高度経済成長のための電力需給に必要不可欠なもの」として、人間が「神」のように奉ってきた「核物質」によって生まれたものである、という一貫したテーマを継承する物語であることに気付かされました。そして、その「核物質」という「神」によって生まれた「神の子」を人間側の都合で勝手に葬り去ろうとする物語として、一方的に攻撃を受けるゴジラの姿が、物悲しいものとして、私の目には映ってきました。

その時、「シン・ゴジラ」の「シン」は人間が崇める「神」としての「シン」によって生まれてきたことを意味

しているのと同時に、人間が「神」を利用するだけ利用して厄介者になったら消し去ろうとする身勝手さ、そんな人間の罪を投影した英語の「sin」であるとの思いに至らされました。

聖書の「シン」

新約聖書のとりわけ福音書が語っているテーマは、実は「シン・ゴジラ」が描いている本質と似ています。ローマ帝国に支配されていたユダヤの国に、イエスという一人の人物が登場しました。イエスはユダヤ人の間で勇敢に神の言葉を語り、地方の町や村でどんどん人気を得ていきました。人々は徐々に、「イエスはきっと武装蜂起して、ローマ帝国と戦う時のリーダーになるだろう。この人こそ、旧約聖書に約束されている救い主・神の子に違いない」と期待をかけるようになりました。そしてイエスはついに、首都エルサレムに上ってきました。人々の熱狂は最高潮に高まりました。

しかし、実際のイエスは武器を取って立ち上がるのではなく、神による平和を確立することを語りました。人々の熱狂は、たちまち冷めてしまいました。そして、ただ冷めるだけに止まらず、「イエスを殺せ」という感情までを引き出してしまうことになってしまいました。新約聖書の福音書は、「神の子」を人間側の都合で勝手に葬り去ろうとする物語であり、人間が「神」を利用するだけ利用して厄介者になったら消し去ろうとする身勝手さ、そんな人間の罪という闇を投影した物語なのです。

「シン」に赦されて

イエスは息を引き取る直前、「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」と父なる神に対して、自分を利用するだけ利用して厄介者になったら消し去ろうとする人の身勝手さを赦して欲しい、と懇願しました。

私たち人間の犯す罪は深く、身勝手で赦されざるものです。しかし、そんな罪の中でもイエスは人間を見捨てず、その人間の罪という闇を終わらせようとされました。

イエスは人間の罪を見つめながらも、そんな罪を終わらせ、人間を赦そうとされました。では、ゴジラはどうでしょうか。架空の物語ではありますが、東京駅で血液凝固剤によって凍結させられたゴジラが、人間の罪を赦し二度と動き出すことのないことを願わずにはおられません。

2016年12月28日　今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録